

売り圧力に押され、10,000円を目前に失速

2009年11月10日(火)

第一生命経済研究所 経済調査部
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

金融緩和継続期待で、リスク志向高まる

G20での景気刺激策や金融緩和策の継続方針を背景に、マーケット全体にリスク資産を選好する動きが強まりました。欧米では株式相場や商品相場が大幅高となり、金先物価格は連日で過去最高値を更新したほか、他の資源価格も上昇しました。為替市場では高金利通貨が軒並み上昇する一方、米ドルは主要通貨に対して売られ、ドル指数(対主要6通貨バスケット)は1年3ヶ月ぶりの安値を更新しました。

米国株式相場は、主要10業種全てが上昇する全面高の展開となり、NYダウは年初来高値を更新しました。特に金融や素材関連株の上昇が目立ったほか、ドル安基調が続く中、海外売上高比率の高い大手ハイテク株なども堅調でした。またM&Aのニュースが相次いだことも株式相場を押し上げる一因となりました。そして、好調なマクロ経済指標も相場の押し上げ要因でした。中国では、10月の新車販売台数が前年同月比72.5%増、1-10月の累計新車販売台数は約1100万台と初めて1,000万台を超えました。また欧州では、ドイツの9月の鉱工業生産は前月比+2.7%と市場予想(同+1.0%)を上回る大幅な伸びとなりました。前年比では▲12.9%ですが、今年4月の▲22.3%をボトムに落ち込み幅は縮小しています。欧州最大の経済大国である同国は製造業の生産増加に伴い、景気回復の勢いが予想以上に早まっていることが示唆される内容でした。ただし、3月初旬以降、対ドルで20%近くユーロが上昇していることから、輸出企業の収益圧迫への懸念も広がっています。

欧米株高も、円高進行で失速

米株高を好感して、日経平均株価は前日より約100円程度高い9,900円台でスタートしました。石油や卸売などの資源関連株のほか鉄鋼や非鉄などの素材関連も堅調でした。一方、内需関連株は引き続き弱く、9,950円を超える水準では売りも目立ち、上値の重さが感じられました。しかし、国内銀行に対し「自己資本比率よりも融資姿勢を重視する」との金融担当大臣の発言が報じられると銀行株中心にショートカバーなどの買いが入り、日経平均株価は一時、10,000円に迫る水準まで上昇しました。しかし売り圧力に押されて買いの勢いは続かず、10,000円手前で失速しました。後場に入ると、輸出関連株の一角が弱含み、地合の悪さが感じられる中、為替市場で英ポンドが急落して対主要通貨で円高が進行しました。これを受けてGLOBEXの米株先物は下げ幅を急速に拡大させ、日経平均株価も引けにかけて外需関連株中心に上げ幅を大きく縮めました。英ポンドが急落したのは、「英国は主要国で最もAAAの格付けを失うリスクがある」との格付け機関のコメントが一部メディアで報じられたことがきっかけでした。結局、日経平均株価は続伸となりましたが、薄商いの中、業績好調な一部の銘柄が押し上げに寄与しており、日本株の弱さが改めて印象づけられる結果でした。

10月の景気ウォッチャー調査では、景気の現状判断DIが40.9と前月(43.1)より低下しました。内訳をみると、企業関連部門が前月比▲0.8ポイントの減少にとどまったのに対し、家計関連部門は同▲3.3ポイントと落ち込みが大きく、特に小売関連の低下が目立ちました。これを受けて、内閣府は街角判断を10ヶ月ぶりに下方修正しました。また10月の企業倒産件数は前月比+9.2%と4ヶ月ぶりに上昇に転じており、景気の下振れリスクを懸念する声も一部で広がっています。

以上